

# 失われた「国」を求めて —スコットランド詩歌にみるラメントの系譜—

## In Search of a Lost ‘Nation’: The Lineage of Lament in Scottish Poetry and Songs

井川 恵理

Eri IKAWA

Scotland, as one of the nations of the United Kingdom, has experienced various campaigns since the Middle Ages—the Wars of Independence, the Union of Parliaments in 1707, the Jacobite Rising/Rebellion. Examples, even from the end of the 20th century and the beginning of the 21st century, are the Blair Labour referendum on reopening of Scottish Parliament in 1997, its achievement in 1999, the Scottish Referendum in 2014 on independence, and then, as a nation of the UK, the referendum on the EU membership which resulted in the so-called current BREXIT issue of 2017. The Scottish people’s identity has always been swayed as to whether to be an independent or dependent nation.

Throughout, the theme and the style of some poetry and songs for Scotland have expressed the lamentation of the lost nation, the preciousness of freedom and the hope to find a new leader as the ones in the past. Such works have been transmitted as memes of Scottish literary tradition. Once a campaign or a ground swell of a movement is felt, the trove of literary work is unearthed, updated and exhibited in the contemporary society. One example is the literary and oral tradition of William Wallace and Robert the Bruce of the 15th century *The Actes and Deidis of the Illustre and Vallyeant Campioun Schir Willam Wallace*, by Blind Harry. Its influence can be seen in the 18th century adapted works of William Hamilton, Robert Burns and other poets. Images of Wallace and the Bruce have been reproduced through literature, songs, and more recently the 20th century film, *Braveheart*. In this paper, the meme of literary works transmitted through Wallace and Robert the Bruce is newly presented as a genre of ‘lament’. For Scotland, it crystallises the aspiration for the lost independent nation and heroes, and ironically, fertilizes anew the soil on which long-remembered works have grown.

Keywords: lament, Wallace, the Bruce, Blind Harry, Burns

### 1 現代のスコットランド詩・歌謡とラメント

#### 1.1 詩・歌謡・音楽と歴史ドラマ・2017年 NHK 大河ドラマ『直虎』と「スコットランドの花」

歴史上の人物や事象を素材にし新たにつむがれた物語やその映像化作品が注目されること

により、再び過去の人物やその人物が生きた時間に光があたり、歴史の再解釈に繋がることや、長く忘れられていた文学作品が命を吹き込まれることがある。2017年のNHK大河ドラマ『直虎』では、柴崎コウ演じた「直虎」という人物の性別や高橋一生演じた小野但馬守の立場等、歴史家の評価や解釈はさまざまであろうが、森下佳子（1971-）による脚本によって、東西を大物策略家にはさまれた小国である井伊がどう「国」として生き残るのか、あるいはそれを諦め、農民たちとともに戦わぬためのたたかいをするのかを常に視聴者に考えさせ、後に私たちが知る「厭離穢土欣求浄土」を願う徳川の世につながるかを模索する作品となっていた。その通奏低音ともいえるべき存在が、今川家の目付小野但馬守政次である。8月20日には彼の処刑の場面が放送され、その音楽を担当した作曲家菅野よう子（1963-）によるCD『直虎―緊急特盤 鶴のうた』がソニーミュージックから発売されると予約が殺到する事態となりスポーツ紙も記事を掲載するまでとなった<sup>1</sup>。ドラマのサウンドトラックを正典とすると、ある種の外典として製作発売された本CDは「政次が生を全うするまでを全14曲で描く。辞世の句と幼少から親しんだ禅語『百尺竿頭進一步』を高橋自身の朗読と『直虎』の音楽を担当している作曲家・菅野よう子氏の音楽でつづる涙の追悼企画。」<sup>2</sup>とある。小野の壮絶な最期を描く脚本に菅野氏が衝撃を受け、着想を得て、生まれて来た作品という。歴史上の記録で井伊家の奸臣とされる小野氏が実は密かに主を支える側であったという設定によりその人物の魅力が増し、「記録」はそれを残させた側の意図が働くもので、必ずしも「史実」とは言えないという、解釈の多面性に視聴者の思考を巡らせることとなった。現代の映像による「物語」の力と言えよう。

長い年月をかけて伝承されてきた一人物や事象をめぐる逸話、物語、歌謡は、一方で、その人物や事象のイメージを形成する役割を担う。「鳴くまで待とうほととぎす」に代表されるように、日本における武将の戦いやその性格を表す逸話は、他国に類を待たず数多あり、歌舞伎やよみうり絵本等での再生、再話が大きな役割を果たして来たそうした物語が、映像により可視化され、歴史的文脈とともに伝えられる時、同人物や事象に新たな解釈をもたらす土壌を培い、現代の文脈で再生されることになる。

「栄光の日々が過ぎ去った今／二度と戻ることはない／それでも我々は立ち上げられる／再び「国」となる日のために（Those days are passed now/ And in the past they must remain/ But we can still rise now/ And be the nation again.）」―これは、2017年現在、グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国（以下、UK）の一員であるスコットランドがサッカーやラグビーの世界大会の場に出場する際、非公式ながら‘National Anthem’「国歌」として紹介される「スコットランドの花 The Flower of Scotland」の第三番の詞である。2012年ロンドン・オリンピック開会式冒頭で「4つのネーションの歌 Songs of Four Nations」が連合王国を構成するそれぞれの「国」の歌を子どもたちが歌う場面があった。イングランド‘Jerusalem’、ウェールズ‘Bread

of Heaven」、北アイルランド ‘Danny Boy’ と並び、スコットランドを象徴したのがこの歌である<sup>3</sup>。フォークソング・バンドであるコリーズ The Corries のメンバー、ロイ・ウィリアムソン Roy Williamson によって1967年に発表されて以来、スコットランド精神を象徴する歌として選ばれ、公式の場でも歌われるようになって今に至る。第1番で「おお、スコットランドの花よ／おまえのような人物に再び会うのはいつのことか (O flower of Scotland/ When will we see your like again)」と呼びかけられているのは、1314年にイングランド国王エドワード2世率いる軍との戦いに勝ったロバート・ザ・ブルース Robert the Bruce (1274-1329, スコットランド王在位1306-1329) である。歴史上の対イングランド戦でスコットランドが勝利したのは二回と言われているが、その一つに導き、イングランド王を「出直してこい」と追い返した (‘And sent him homeward Tae think again’) 強きリーダーとして、「おまえのような人物 your like」の登場が待ち望まれていることを伝えている。上記スポーツの試合開始時、この歌を歌うことは、その都度、歴史上の人物の「偉業」を思い返し、一度失った「国」を再生させるという思いを確認することにもつながっている。

## 1.2 本稿の目的と流れ

2015年度のJSLAにおける拙論「スコットランドに歌う—2014年『独立を問う住民投票』を支えた歌」では、2014年の現地調査をもとに、歴史的転換点に選ばれ、唱和される大衆文化としての歌謡の特性とその意味、歌われる場について考察した。スコットランド人が政策を自ら決する場としての「国」を求める「独立を希求する声」、その声を代弁する歌詞、メロディの親しみやすさ、壁を乗り越えるための力をどのように表現しているかが主題であった。18世紀から20世紀に至るスコットランドの転換点と詩や歌の関わりをたどり、1707年のイングランドとの議会の合同を嘆くロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-1796) による詩、「国に群れなす悪党どもよ Such a Parcel of Rogues in a Nation」(1792)<sup>4</sup>、「スコットランド人よ Scots, Wha Hae」(1793)、現代詩人イアン・クライトン・スミス Iain Crichton Smith (1928-1998) による詩「新しい歌の始まり The Beginning of a New Song」、プロクレイマーズ The Proclaimers 「僕はなるんだ (500マイル) I’m Gonna Be (500 Miles)」(1988)<sup>5</sup>を主に取り上げた。このように現代スコットランドの独立を求める運動と歌との関連、詩歌の歴史の流れをたどる過程で、その原点とも言うべき人物像、そして「国」という存在にスコットランドの人々が託してきたものについて、さらにその流れを遡ることの必要性を感じてきた。

そうした詩や歌謡の源流を求めて改めてスコットランド文学史を遡り通観した時、中世スコットランドの「独立のための戦い Wars of Independence」の時代から脈々と息づく「ラメント lament」の系譜ともいえるべき表現があることを探るものである。ラメント、「嘆き」「哀歌」とも訳される表現方法は、文学上は詩作品の形式の一つとして知られている。本稿では、形式としては物語詩など本来「ラメント」に属さない詩作品であったとしても、スコットラン

ドの詩作品や歌謡群に、共通の主題を踏まえた語りの形として、「ラメント」と呼ぶべき遺伝子をもった作品の系譜があるように考えられることを提示したい。そこに通底するのは、失われた「国」を求める各時代の声である。

文学史においてラメントという分野が一般的にはどのような作品を指すのかを踏まえ、その上で、本稿で改めてスコットランド史と連携する詩歌におけるラメント的要素について考察する。考察にあたっては現代スコットランドの非公式国歌ともいえる歌 ‘The Flower of Scotland’ や ‘Caledonia’ をきっかけとし、その原点ともいえる15世紀の作品、「盲目のハリー」の『ウォレス伝』<sup>6</sup>等に遡る。ジョン・バーバー John Barbour (c.1320–1395) の *The Brus* (= *The Bruce*, 1375) を継ぎ、スコットランド文学史の序章を飾る一作品と位置付けられている作品である。1707年の議会の合同後に生まれた作品をみていくと、中世から現代に脈々と息づくその遺伝子ともいうべき要素が見えてくるのではないかと思われる。

### 1.3 ラメント lament とは

一般的に文学史における「ラメント」は「哀歌、追悼の音楽」と解釈される。日本語ウェブサイト上で検索すると、現代における音楽やゲームなど様々な創作作品に用いられる「ラメント」というカタカナ語の使用例もあり興味深い。世界では旧約聖書の『エレミアの哀歌』、イエス・キリストの磔刑後の姿に嘆く「キリストの哀歌 Lamentation of Christ」をテーマとし絵画もある。一方、詩作品上の分類として英語・電子版『ブリタニカ国際百科事典』では次のように解説されている。

Lament, a nonnarrative poem expressing deep grief or sorrow over a personal loss. The form developed as part of the oral tradition along with heroic poetry and exists in most languages. Examples include Deor's Lament, an early Anglo-Saxon poem, in which a minstrel regrets his change of status in relation to his patron, and the ancient Sumerian "Lament for the Destruction of Ur." Compare complaint; elegy.<sup>7</sup>

「物語詩ではない形で、人物の喪失に発する深い嘆きや悲しみを」描くものであり、多くの言語において英雄詩の伝承と密接に結びついている。例えば初期アングロサクソン詩での「デオルの嘆き」のように、吟遊詩人がそのパトロンとの関係のなかで、自分の身分を変えることになったことを嘆く作品や、古代シュメール語の「ウル市破壊の嘆き」などが例として挙げられている。この定義における ‘personal loss’ には、個人の立場や恋人、家族の喪失とともにその故郷や国の喪失が含まれることが理解できる。また、最後に挙げられている complaint や elegy を参照すると、特に elegy に lament と重複する要素があることがわかる。皆の知る人物や友、愛する者の死を悼み作られる中世詩とある (‘Elegy, meditative lyric poem

lamenting the death of a public personage or of a friend or loved one; by extension, any reflective lyric on the broader theme of human mortality.'). 'Elegy' は日本語では現在「挽歌」や「哀歌」と訳されるが、ギリシア・ローマの古典文学においては、あくまでも elegy は強弱弱格 6 歩格、強弱弱格の 5 歩格からなる 2 行連句という韻律の形式に由来する言葉であり、何かを「哀悼する」内容を指すわけではない。一方、16 世紀以降の英文学においては、elegy は lamentation の詩、嘆きの詩を意味するようになり、韻律の選択に詩人は特に縛られることはないと言われている (But in English literature since the 16th century, an elegy has come to mean a poem of lamentation. It may be written in any metre the poet chooses.)<sup>8</sup>。表現形式としては型があり、そのキリスト教的意匠が発揮される型として、理想とする人物を自らを導く羊飼いやとして描き、その導き手の喪失を憂い、受け入れるというものである。その背景、世界観もまた、理想の牧場となるパターンである。その人物を失った嘆きと苦しみから始まり、葬式の行列、自然からの共感的表現、無慈悲な死が描かれることが多い。その例として挙げられているのが、大学時代の友でもあったエドワード王崩御の際に書かれたジョン・ミルトン John Milton の「リシダス Lycidas」(1638)、ジョン・キーツが亡くなった折に書かれたパーシー・ビッシー・シェリー Percy Bysshe Shelley の「アドネイイス Adonais」(1821)、詩人アーサー・ヒュー・クラフの死に際して書かれたマシュー・アーノルド Matthew Arnold の「サーシス／テュルシス Thyrasis」(1867) である<sup>9</sup>。'It ends with acceptance, often a very affirmative justification, of nature's law.'<sup>10</sup> とあるように、個人の死、それがもたらす自分とその世界の悲しみ、そして神のもたらした自然の摂理としての受容が主題となることがわかる。ロマン派の時代には「墓」で故人を悼み、その生涯を想う作品が現れる<sup>11</sup>。トマス・グレイ Thomas Gray の「村の教会墓地で書かれた哀歌 An Elegy Written in a Country Church Yard」(1751) などがイギリス文学史に登場する elegy として代表的なものと言えよう。

本稿では、こうした文学史上の lament、complaint、elegy の定義をふまえつつ、スコットランド独立の危機や喪失、その復活を人物に託す詩や歌謡について、その形式には多様性があるものの、主題としての lament—失われた国、その国を象徴する人物への想いが流れていることを論じる。Lament の上記定義では「物語詩ではない」形式とあるが、特に本論で lament という用語を選択しているのは、もともと英雄詩としての流れと結びついたカテゴリーであり、スコットランド詩群においても、「失われた英雄」の存在が強く通奏低音として流れているからである。

## 2 18世紀から20世紀—スコットランド独立喪失への哀歌

### 2.1 ロバート・バーンズと英雄の再生

拙論において、ロバート・バーンズ Robert Burns (1759–1795) 作の「国に群れなす悪党ど

もよ Such a Parcel of Rogues in a Nation」(1792)<sup>12</sup>の3連詩により、1707年の連合法により失われたスコットランドの政治的独立を嘆き、その憤りを伝えそれを導いた貴族を「悪党ども」として非難していることを述べたが、今回は本作のラメント的要素と後世に怒りを伝えようとする意図を確認してみたい。その冒頭は次の通りである。

さらば、スコットランドの名声よ／さらばわれらの過去の栄光よ／さらばスコットランド人の名さえも／あれほど戦いの物語で名をとどろかせたのに！／サーク川はソルウェイ湾の砂地に流れ／トゥイード川は海に注ぐ／イングランドの一地域となった土地を示すため／国に群れなす悪党どもよ！

Fareweel to a' our Scottish fame,/ Fareweel our ancient glory;/ Fareweel even to the Scottish name,/ Sae fam'd in martial story!/  
Now Sark rins o'er to the ocean,/ To mark where England's province stands; / Such a parcel of rogues in a nation!<sup>13</sup>

1707年のイングランドとスコットランドの議会の合同によって、スコットランドの議会自治が失われた喪失感を85年という歳月の後に描く詩である。バーンズ自身が議会の合同から半世紀経過した時点で誕生しており、自身がその場にいることのできなかった悔しさもまた感じられる詩となっている。一つの国としての尊厳が失われたことを綴る言葉が多用されている。まず‘Fareweel’という別れの言葉から始まり、その別れを‘Scottish fame’, ‘our ancient glory’, ‘even to the Scottish name, / Sae fam'd in martial story!’と過去の名声、栄光、戦いで名を馳せた者に告げることから始まる。‘Now’から転じて、イングランドとスコットランドの国境を西に注ぐサーク川、東に注ぐトゥイード川で示し、その位置は変わらぬのに、「イングランドの一地域となった土地を示すため」と表現することでスコットランドがイングランドの一地域となってしまったかのような失意の感覚を表現している。ラメントの定義としての「喪失に発する深い嘆きや悲しみ」(1.3)に合致する。それが国としての存在の喪失への嘆きであるとともに、嘆きのみに終わるのではなく、同時に、その嘆きを引き起こした当時の貴族たちへの怒りを表現し、聴く者を鼓舞する力を持つことが本作の特徴でもある。

第2連末では、「イングランドの金が我らの骨となってしまった／国に群れなす悪党どもよ！ But English gold has been our bane,/ Such a parcel of rogues in a nation!」と嘆く。第3連では、過去にイングランドとの戦いで勝利した英雄二人の名が添えられる。

裏切りが我らを売る／そのような日を経験する前に／老いた白髪頭を土に横たえよう／ブルースと忠義にあついウォレスとともに

I would, ere I had seen the day/ When treason thus could sell us,/ My auld grey head had lain in clay



/ With Bruce and loyal Wallace.

独立戦争の続いた13、14世紀に、イングランドに敢然と立ち向い勝利したウィリアム・ウォレスとロバート・ザ・ブルースの姿を墓の中に求めるしかない嘆きが最も伝わる表現である。ただ、このラメント的要素で詩が終わるわけではない。後半の4行は力強い「宣言」でくくられている。

我が髓、力、失われるとも、命の最期まで／これを宣言する／我らは買われ、売られたのだ イングランドの金のため／国に群れなす悪党どもよ！

But pith and power<sup>14</sup> till my last hour/ I'll make this declaration:/ We were bought and sold for English gold, / Such a parcel of rogues in a nation!

‘I'll make this declaration’ と、強い意志を示す will が、現世のみではなく、後世にも伝えていくことの必要性を訴えている。すでにイングランドとの連合王国としての道を歩み、ジャコバイト蜂起／反乱に挫折を味わっている1790年代という時代に入っているが、独立して政治を行っていた国としての尊厳が、一部の者の力で変えられてしまったという彼の認識を伝え、それをこれからスコットランドを担う者たちに受け継いでもらおうとする意欲が感じられる。

この詩にはメロディがあり<sup>15</sup>、フォークソングとしても伝えられている。その曲調もまた、嘆きや怒りを表現しているようである。Bマイナーの音階を用い、八分音符と四分音符の構成で4拍子のリズムを淡々と刻む。スコットランドの民謡では、ターンタ・タターンという、弾むようなストラスペイの付点音符の組み合わせが特徴としてあげられるが、本作のメロディでは現れない。付点がないわけではないが、前半では、単一のターンタ（付点八分音符＋十六分音符）が3回現れるのみである。また、後半では例えば、第1連‘To mark where England's ~’の mark where の部分、第3連‘We were bought and sold for English gold,’の were bought の部分と、嘆きや怒り、それを記憶するのだという宣言を表現する部分で初めて「タターン・タターン」という付点の繰り返しがあり、さらに、本作では最高音のDとFの組み合わせとして際立っている。そこに、失われたスコットランド政治への詩人のラメントの声を凝縮しているかのようである。

翌年発表される、「ウォレスの血を引くスコットランド人よ Scots, wha hae wi' WALLACE bled」(1793)において、「…ブルースが導いたスコットランド人よ／血の床によろこそ／もしくは勝利へ！」(… Scots, wham BRUCE has aften led,/ Welcome to your gory bed,—/ Or to victorie.—)<sup>16</sup>と13、14世紀の対イングランドとの独立戦争にてスコットランドを数少ない勝

利に導いた英雄たちを祖とし、その力を借りて同時代人を鼓舞しようとし、ことをイメージとして刻印しようとしたことを述べた<sup>17</sup>。そのイメージは、20世紀に引き継がれ、メル・ギブソン監督主演の映画『ブレイブハート *Braveheart*』（1995）において、自ら選択する「自由」の尊厳を明確なメッセージとして伝えている。

## 2.2 20世紀フォークソングにおける「失われたスコットランド」再生

2014年のスコットランド独立を問う住民投票を支持する市民の間で繰り返し歌われた歌の一つ、「カレドニア Caledonia」におけるラメント的要素を確認したい。本作は、現代スコットランドのフォークシンガーとしてカリスマ的人気を博すドゥギー・マククリーン (Dougie MacLean, 1954-) による1978年発表の歌である<sup>18</sup>。スコットランドのラテン語の古称 Caledonia をタイトルに冠し、郷愁をさそうメロディと美しいスコットランドの地を描写する。「帰ろう」と呼びかける詞は、故郷を思う者に訴える力があり、マククリーンのライブでは聴衆が熱唱する作品の一つである。

全3連の歌詞、その冒頭は次のように歌われる。

「君が気づいているかわからないけれど、僕に変化が起こっているんだ／この数日、どこかにふらふらと行ってしまいそうな気がしている／古い物語を語ったり歌を歌ってきた／すると考え始めたんだ／自分はどこから来たのかを／それが、今日、自分がどこか遠くにいるような気持ちになってる理由だよ」

I don't know if you can see, the changes that have come over me/ In these last few days, I've been afraid that I might drift away/ And I've been tellin old stories, singing songs/ That made me think about where I came from/ And That's the reason why I seem so far away today.

歴史的事象に言及することなく、日常の中の会話のように you に語りかけている。その日常に影をさす 'the changes' が何であるのか、ささやかなミステリーを紡ぐ出だしである。どこか遠くに来てしまった、今いる場所が自分の居場所ではないような、自分が自分ではないような浮遊感。その感覚が「古い物語」や「歌」を口ずさむことにより起こっていることを伝える。

過去を振り返り、今の「この場所」が理想とするものではないことが、比喩によって綴られる。第3連で「僕」は何もない部屋で暖炉の前に座り、ただ森の声を聞いている。「炎はそれ以上高く届かず、すっかり弱まり、そして今は消えてしまった。The flames that couldn't get any higher, well they've withered, now they've gone」本作が生まれた頃、スコットランドは北海油田開発後最初の独立を問う住民投票を行っている。投票は1979年、過半数 (51.6%) が独立に賛成をしながら、投票率で換算すると 32.8% の賛成に過ぎず、急遽作成された「40%



制度」であったことを理由にその結果は反映されず、「独立」は幻に終わる<sup>19</sup>。本作発表の時期をみると、1974年の総選挙でスコットランド独立を目指すスコットランド国民党（Scottish National Party）が躍進し、住民投票への機運が高まっていた頃と重なる。一度消えてしまった「炎」を前に、どうすべきか、歌い手はこう続ける。

「考え続けて、進む道ははっきりしている。明日何をすべきか、わかっているんだ。But I'm steady thinking, my way is clear and I know what I will do tomorrow」失われた過去を描くラメント的要素とともに、これから進むべき道を示す標を表している。

各連のリフレインも忘れてはならない。‘But let me tell you that I love you, that I think about you all the time/ Caledonia you’re calling me and now I’m going home/ For if I should become a stranger you know that it would make me more than sad/ Caledonia’s been everything I’ve ever had.’「愛してる、そして常に君のことを考えているよ」と伝えたのち「カレドニア、君が呼んでいる。だから僕は帰るんだ。」と、「君」が「カレドニア」というスコットランドの古称であると明かし、「自分がこれまで培ってきたすべて」に匹敵する理想郷であると宣言する。一人称のモノローグによる展開により、歌い手は‘I’として聴き手に語りかける。過去と現在を浮遊しながら往復するような歌詞に、個人の経験を重ねると同時に、カレドニア＝スコットランドのあるべき姿に立ち戻ろうという呼びかける歌となっている。

それを語りかけるように歌うマクリーンの声は、聴く者の心に沁み入る。そしてこの歌のタイトルが「カレドニア」というスコットランドの古称であることに気づくと、その浮遊感が、マクリーン個人のみならず、スコットランドという国の居場所、国であって国ではないその半端な感覚、古い歌も物語もあるのに、それが今につながっていないような感覚、それを伝えている歌と読み替えられる。20世紀後半幾度も試された独立を問う住民投票であったが、なかなか叶わない独立への夢、その儚さと強さを併せ持つ歌といえる。2014年の住民投票前夜のグラスゴーそして独立派「敗戦」のわかったグラスゴーの同じ広場で、この歌は「500マイル」とともに繰り返し歌われた。失われた国を嘆くラメントの要素を紡ぎつつまたこの国が次に進むための決意を伝える歌といえよう。

### 3 中世スコットランド文学 盲目のハリーの『ウォレス伝』にみるラメント的要素

#### 3.1 映画 *Braveheart* から盲目のハリーの『ウォレス伝』へー500年の時の旅

1994年に製作されたメル・ギブソン監督・主演による映画『ブレイブハート』は、翌年発表され、スコットランドにウィリアム・ウォレス旋風を巻き起こすとともに、スコットランド議会再開のための住民投票を後押しする作品となった。この映画の脚本家ランダル・ウォレス Randall Wallace (1949-) が構想の中心として用いたのが15世紀、盲目の詩人として名をはせた Blind Hary (現代の綴りでは Harry. 1450-1493) により伝えられる『輝かしく豪

胆なる勇者ウィリアム・ウォレス卿の行いと功績 *The Actes and Deidis of the Illustre and Vallyeant Campioun Schir William Wallace*』（以下、盲目のハリー版『ウォレス伝』）<sup>20</sup>、およびウィリアム・ハミルトン William Hamilton によって18世紀初頭に読みやすく書き換えられた『スコットランドの戦術指揮官かつ司令官でもある著名なウィリアム・ウォレス卿の人生と英雄的偉業 新版 *New Edition of the Life and Heroick Actions of the Renoun'd Sir William Wallace, General and Governour of Scotland*』（以下、ハミルトン版）である。盲目のハリー版『ウォレス伝』は、1508年頃スコットランドで出版されてから、1707年の議会の合同までに23版を数えたという<sup>21</sup>。18世紀のスコットランドでは、「聖書の次に普及している」<sup>22</sup>とされるハミルトン版が、ロバート・バーンズらスコットランド詩人に影響を与えたと言われている。「悪党どもよ！」と議会の合同の記憶を刻印しようとし、1793年の「スコットランド人よ *Scots, Wha Hae*」と呼びかける詩の根底にブルースやウォレスの存在が通奏低音のように響いていることもうなづける。

映画『ブレイブハート *Braveheart*』は、のちにスコットランド王となるロバート・ザ・ブルースの語りにより、ウォレスの生涯と自らへの影響を伝える手法をとっている。‘Commoners’として戦いにかり出される農民たち、そして自分たちの領土維持と拡大ばかりに関心を持ち、イングランド側に「安堵」される立場に成り下がっている貴族に、ウォレスがどのように働きかけるかが主題となっている。アカデミー賞を複数受賞してはいるものの、「初夜権」などイングランド側の残虐さをことさら強調する脚本、戦いやウォレスの処刑の描き方に「暴力漬け」、「ゲリラを英雄視？」という批判も少なくはなかった。後者の「ゲリラを英雄視？」という評価はイングランド史的視点からみるとまさにウォレスはゲリラとして伝えられていたということの裏返しでもある。戦い、恋、「自由への希求」というメッセージの明確さから、「偉大なるB級映画」<sup>23</sup>とも言われている。一方、ワールド・プレミア スコットランド〈スターリング *Stirling*〉において実施されたことも現地の人々にとっては大きな誇りとなった。政策的効果と同時に民衆文化におけるスコットランド「独立」のイメージ作りに貢献する「スコットランドの英雄」像として、本映画の影響は今日にも続いている。「スターリング橋の戦い」を平原での戦いに修正したり、エドワード2世のもとにフランスから嫁いだ王女との邂逅などは映画向け脚色とはいえ、主たる情報伝達が口伝えであった時代に、人々が噂するウォレスの身体特徴（7フィートもの大男、目から火を放つ、など）やウォレス自身を描写する言葉は、『ウォレス伝』の描写を効果的に用いている。一方で、「伝説」上の人物が、実際の姿とかけ離れたものであることを7フィートには到底満たないメル・ギブソンが演じ、「そう伝えられているらしい」とウォレス自身が言う台詞によりその伝承を逆手にとっている。「物語」が人物像を作り、それが定着していく過程を逆説的に提示した脚本ともなっている。

本作をめぐるスコットランド内外での盛り上がりに伴い、1998年にはこのハミルトン版『ウォレス伝』がエディンバラの Luath Press Limited からペーパーバック版として発売され、翌年には二刷が発行された。私自身その恩恵をこうむった一人である。さらには、ハミルトン版『ウォレス伝』の祖ともいべき作品、『盲目のハリーのウォレス *Blind Harry's Wallace*』に注目が集まるようになる。

### 3.2 盲目のハリー版『ウォレス伝』のラメント的要素

盲目のハリー版『ウォレス伝』は、初期のスコットランド語による文学の一つとされ、ラテン語文書隆盛の時代における記念碑的作品の一つとされる。歴史的文書というよりは、『ホメロス』等に代表される英雄創造の文学作品で、反イングランド精神にあふれている作品である。盲目のハリーは、本作を書き残しただけではなく、吟遊詩人としても活躍していたと考えられている。15世紀、時のスコットランド王ジェイムズ4世 James IV の宮廷で数回「支払い」を受けた記録が当時の会計報告書に残されており<sup>24</sup>、何らかの謝金ではないかと想像される。本人が主張する「ウォレスの偉業を知る人物がラテン語で書き残した物語の翻訳」という言葉は、ラテン語「原典」が発見されていないことからこれまでのところ否定されている<sup>25</sup>。スコットランド国立図書館 the Scottish National Library には、本作の16世紀の写本が残されている（1508）。私自身、2005年にその写本原典を貴重書室で閲覧し、ページに走るペンの跡が変化していく様から、写本書記者の喜び、書き疲れ、余白の遊び絵などその息づかいに心躍らせる機会を得たことは忘れられない<sup>26</sup>。ただしその500年前の書き文字を即座に理解することは困難で、書き起こされた印刷書籍に頼り内容を追っている。本作は11,877スタンザから成り、12部構成で、Book1からBook12として編集されている。（写本では11部となっていることを添えておく。）ウォレスの誕生から少年時代、処刑される晩年までが描かれるが直接的な死は描写されず、暗示のみである。写本書記者は盲目のハリーの1世紀後にこの物語を書き残したとされている。18世紀のハミルトン版はその再話作品ともいえるのである。

12巻からなる盲目のハリー『ウォレス伝』大著の内容の主要部分は、現在では、UKのロチェスター大学図書館ロビンズ図書館デジタルプロジェクト・中世英語文書シリーズ『ウォレス：場面抜粋 *The Wallace: Selections*』(2003)<sup>27</sup>において閲覧することができる。抜粋とはいえ、A4判印刷にしてBook1から6までおよそ83頁、Book7から12まで104頁、その内容に解説注23頁、語彙注14頁が添えられている。本文は各頁69行から成り、Book6までで約5720行、Book12まで約11,000行を抜粋している。Book9はウォレスのブリテン島での生活や活躍ではなく、フランス行きを描写しているためか、割愛され、編者アン・マッキム Anne McKim (2003) があらすじをまとめているのみである。その解説注から改めて原文を振り返り反芻する楽しみを与えてくれる。

大分な本作の詳細をたどることは時を改めることとし、ここでは、上記バーンズらの嘆きにつながるラメント的要素が顕著な箇所に触れておこう。例えば、Book12の1109行から1124行にかけて、‘Allace,’ (Alas) が繰り返される表現がある。各地の貴族に裏切られ、処刑への道に向かうことになるウォレス、彼なき後のスコットランドの行く末を嘆く描写が続く。後にバーンズらが繰り返し刻印しようとするスコットランド独立の喪失を嘆く詩作品の原点がここにあることを教えてくれる。

ああ、スコットランドよ、おまえは誰にその苦しみを訴えるのか／ああ、その痛みを誰に抑えてもらうのか／ああ、その最も力強き助けは今や地に倒されたのだ／お前を支える勇猛なる長（オサ）は容赦なき枷につながれている／ああ、そなたはもうその道を照らす光を失ったのだ

Allace, Scotland, to quhum sall show compleyn?/ Allace, fra payn quha sall thee now restereyn?/  
Allace, thy help is fastlie brocht to ground:/ Thi best chyftaine in braith bandis is bound./ Allace,  
thow has now lost thi gid of lycht. (1109–1113)<sup>28</sup>

#### 4 結論

15世紀の盲目のハリーの言葉が、ハミルトン版、そしてランダル・ウォレスの脚本によって蘇る。それは2014年のスコットランド独立を問う住民投票におけるトミー・シェリダンの呼びかけ「兄弟、姉妹たちよ Brothers and Sisters!」に呼応する。「ウエストミンスターに任せておくな。自分たちの将来は自分たちで決めるのだ!」と、あたかも『ブレイブハート』のウォレスの Freedom Speech のように、聞く者の心をつかんでいく。独立を求める人々の声は、死せる英雄の声を傍らにおきながら、語り、詩、歌として綿々と綴られてきた作品の結晶でもあった。

本稿では、盲目のハリーが英雄の喪失を嘆き、スコットランドの民の奮起を促すフレーズが、その後のスコットランド・ナショナリズムに結びつく詩作品、歌謡に繰り返される様を「ラメント」としてくくり、その遺伝子の系譜を追った。それは国やそれを支える英雄の喪失を「死」を悼むラメントであると同時に、バーンズ作品にみるように、そのラメントを声として発し、次の世代に嘆きや怒りを伝えることが意識されている。そして、マククリーンの作品は、「次に自分たちは何をすべきか」を自ら考えることに導いている。2017年現在、スコットランドは今なお独立の道を探る道程にある。その叶えられない夢がまた、これまでのラメントを美しく光らせ、次の物語や歌を生む原動力になることもまた事実である。

## 注

- 1 『『直虎』政次追悼 CD が大反響 “ロス” 余波…注文殺到で品切れ状態も』『Sponichi Annex』(2017 年 8 月 24 日) <https://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2017/08/24/kiji/20170824s00041000168000c.html>
- 2 Ibid.
- 3 IOC/BBC (2012). 'The Opening Ceremony'. *London 2012 Olympic Games*. DVD. Disc 1.
- 4 'Such a Parcel of Rogues in a Nation' (no. 375). Kinsley, James ed. (1969). *Burns Poems and Songs*. Oxford University Press. 511–512. インターネットサイト上には 1791 年という記載もあるが、本書の年代分類に準じた。
- 5 The Proclaimers. (1988) Album *Sunshine on Leith*. 歌詞 <http://www.metrolyrics.com/im-gonna-be-500-miles-lyrics-proclaimers.html> 'STORY—the Proclaimers'. Official Website.
- 6 McKim, Anne ed. *The Wallace: Introduction*, from *The Wallace Selections* 2003. Middle English Texts Series, A Robbins Library Digital Project, University of Rochester, River Campus Libraries. <http://d.lib.rochester.edu/teams/text/mckim-wallace-introduction> Retrieved on August 1st, 2017.
- 7 'lament' *Encyclopaedia Britannica*. <https://www.britannica.com/art/lament-poetry>
- 8 'elegy' Ibid.
- 9 Ibid.
- 10 Ibid.
- 11 Ibid.
- 12 'Such a Parcel of Rogues in a Nation' (no. 375). Kinsley, James ed. (1969). *Burns Poems and Songs*. Oxford University Press. 511–512. インターネットサイト上には 1791 年という記載もあるが、本書の年代分類に準じた。
- 13 'Such a Parcel of Rogues in a Nation', Burns, Robert ed. (1811). *The Caledonian Musical Museum or Complete Vocal Library of the Best Scotch songs, Ancient and Modern*. J.Dick, London, Vol. III. Reprinted by AMS Press, New York (1976). 121.
- 14 'But pith and power' の解釈には諸説あるが、バーンズ関連の用法としては、彼の政治的信条を表現する句として用いられることが多い。例えば、Scottish Poetry Library 主催、2018 年 1 月 25 日 (バーンズ生誕日) ～ 3 月 15 日開催の展覧会の案内にこのフレーズが用いられている。彼の「抑圧や不正義を訴え抗うために書く」姿勢に焦点をあてた展覧会とのことである。'Pith and Power: A Celebration of Robert Burns' <http://www.scottishpoetrylibrary.org.uk/connect/events/pith-and-power-celebration-robert-burns>
- 15 Kay, Peter (1995). *A Jacobite Legacy—A Short History of the Jacobite Risings in Songs and Words*. Soar Valley Music. 14.
- 16 'Robert Bruce's March to Bannockburn' (no. 425). Kinsley (1969). 561–562.
- 17 井川恵理 (2015). 「スコットランドに歌う—2014 年「独立を問う住民投票」を支えた歌—」 *Journal of the School of Liberal Arts*, Volume 7. Ohkagakuen University.
- 18 MacLean, Dougie (1977). 'Caledonia'. Album *Craigie Dhu* (1983).
- 19 Open Learn (updated 23<sup>rd</sup> March, 2015). '1979: The First Scottish Referendum on Devolution'. The Open University <http://www.open.edu/openlearn/people-politics-law/1979-the-first-scottish-referendum-on-devolution>
- 20 1477 年頃までかけて数年にわたり書かれた作品と言われている。現在残るのは Watson, Roderick (1995 - Published date not printed.). *The Poetry of Scotland—Gaelic, Scots and English*. Edinburgh University Press.

- 21 King, Elspeth (1998). 'Introduction'. William Hamilton of Gilbertfield, *Blind Harry's Wallace*. Luath Press. xi.
- 22 Ibid.
- 23 Scotsman 1996.
- 24 King. xvii.
- 25 King. xx.
- 26 スコットランド国立図書館 National Library of Scotland 写本番号。MSS. 63 Advocates.MS.19.2.2.  
1488 John Ramsay による写本を閲覧した。
- 27 McKim.
- 28 Ibid.